

ナリ士闘隸奴

lumi27

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

奴隸闘士物が書きたかった。

目次

闘技場第1試合

初試合／終わりの始まり	1
不思議な淫紋	4
風呂場にて	8
サキュバスのコンビニ	12
新入歓迎会／ランジェリーショップ1	15
H 遍歴チュートリアル	20
体感H 遍歴／野菜炒め4番絞りソースかけ、謎ホワイトソーススープ、触手ステキ4番絞りソースかけ	23
談話室の雑談／初仕事	26
墮落への道	29

初試合／終わりの始まり

淫魔の都ラストエルベのスラムに新たに作られた闘技場でついに初試合が行われる。奴隷闘士同士での対戦で、レートは共に0。

観客はほぼ無の情報の中で賭けの内容に頭を悩ませる。

そして賭けの締め切りが宣言されたところで司会から両者の紹介がされるようだった。

【司会サキュバス】

「さーあ！今までおまたせ致しましたあ〜♪」

「これより魅惑の闘技場での初試合を開催致しますあす〜♪」

「司会進行を務めますのはこのアタシ、ミミルミよ〜♪」

ミミルミが壇上で大声を張り上げたところで観客はどよめいた。

なにせ、娼婦同然なほどにギリギリな下着姿だったからだ。

ミミルミが紹介した奴隷闘士は、申し訳程度の軽装で下着が全く隠れていなかったが、ミミルミはそれよりも肌を隠していなかった。

【司会ミミルミ】

「そんなにアタシが魅力的なのお〜？」

「別にいいけど安くはないし、予約はちゃんと取ってよね♪」

ミミルミが冗談を言った後両者を紹介する中で、今回場内に入場する奴隷闘士リナはこれまでのことを思い返していた。

そもそもリナが奴隷堕ちしてしまっただけは家出だった。

リナは剣の腕に自信があり、世直しの旅を目論んだところを父親に反対されてしまった。

そこを無理押しして村から出てしまったわけだが、人攫いに負けて捕まってしまったのだった。

リナが捕まった奴隷商会はあまり設備投資するところではなかったらしく、隷属の首輪や媚薬等をされることはなかった。

ただ、リナが反抗するたびに暴力を振るわれた。

うっかり用心棒がリナの顔を傷つけてしまったために商品価値が落ちたとして、最終的には備品扱いとして乱暴される日々を送る羽目になった。

反抗心が折れる寸前のところで、リナはある出会いをすることになった。

【痴女っぽい双角】

「大丈夫?……じゃないかー」

「元は綺麗だったんだろうけどこんなにボロボロにするなんてなってないわねえ」

リナはドロドロのボロボロで、身動きする余裕すらなかった。

【痴女っぽい双角】

「この辺の敵みんなノしちやつたし、せつかくこの娘生きてるなら貰いたいなあ……」

「ねえねえ、アナタは今生きたい?死にたい?」

【リナ】

(生きたい……こんな人生絶対許せない……)

【痴女っぽい双角】

「返事ないけど、このアゴじゃムリかー」

「とりあえず治療からだねー」

「これ受けるならアナタはアタシのもの……ってことになるけどそれでいい?」

「まあ返事なんて聞かないんだけど」

そうしてリナは下腹部に光るハートの模様を付けられ、サキュバスの奴隷になってしまったのであった。

不思議な淫紋

今までにないほどの快樂の渦に巻き込まれ、気がつくとも周囲はひどく液体で汚れて
た。

【痴女っぼい双角】

「いや、元々じゃない？」

「だって掃除してないんだしさあー」

「それはそうとおはよう奴隷ちゃん♪」

「あれから3日くらい経ったけど鏡は見る？」

見ないと言つてもどの道見せてくるに違いない。

私は奴隷、このヒトはご主人サマ。

それに今の姿は気にならないこともないし。

【痴女っぼい双角】

「いい娘ねえ〜♪」

「反抗的なのが売りじゃなかったのお〜？」

【リナ】

「アイツラと全く違うから」

「それにアイツラ全然気持ちよくなかったし」

【痴女っぽい双角】

「そう？ハマつちやった？」

「なんならそういう仕事してみる？」

【リナ】

「!!!」

「ひどい嫌悪感だった。」

いくらこのご主人サマが気持ちよくしてきても、客がそうとは限らない。

私は反抗して耐えるくらいでできると思っていたけど、それはきつと痛みだったからだ。

【痴女っぽい双角】

「いきなりはちよつとムリだったかなあ？」

「でもね、きつとそのうちアナタから求めだす」

「せめて食事だけは取ったほうがいいんじゃない？死にたくなければね？」

「そうそう、アタシはミミルミ、サキユバスのミミルミよ」

「アナタの名前を教えて？別に偽名でもいいけど」

「あつ言えないんだつたらメスネコのタマつて呼ぶからね」

流石にそれは嫌だった。

なので普通に名乗ることにした。

【リナ】

「リナよ。ここじゃただの奴隷のリナ。感謝はしとくわ、ご主人さま」

【痴女っぽいミミルミ】

「あーそつか、アタシが助けたつてことになってたんだっけ？」

「みんなで色んな奴隷商襲つたもんねえ〜」

「つと忘れるところだった、鏡、鏡」

昔売り飛ばされた貴族の館よりもはつきり映る気がする手鏡を渡された。

殴られたり鞭打たれたりで無惨になってたはずの顔や全身が嘘のように元通りに綺

麗になっていた。

気になるのは下腹部の模様。

何故か光っているようだけど……。

【淫魔ミミルミ】

「これ気になる？ 気になるよねえ〜♪」

「浴びたり飲んだり注がれた精液をエサやチカラに変える淫紋よ〜」

「アナタの場合は緊急事態だったから元々かかっていたのじゃ足らなかつたし追加で注いだのよ」

「いい具合だったし、そういう仕事に興味持ったら教えてね♪」

道理であれだけのドロドロが綺麗になつてゐるはずだ。

それ以外の汚れはそのままだし。

【淫魔ミミルミ】

「気が付いた？流石にこのままじゃダメよねー女としてはね」

「風呂場ができてゐるから洗つてアゲルねー」

他にも色々とおかしなことが起こつていたはずだったが、何故か痛みもなく動く体に取り戻されて気がつくのは後の話だった。

風呂場にて

明らかに必要以上に触られた気がするが汚れはきちんと落としてもらえたようだった。

どうにも足腰が立たないが。

【淫魔ミミルミ】

「すっかり綺麗になったねえ♪」

「あのままのが可愛いってサキユバスも居るみたいだけどアタシはしっかり磨く派」
「せっかくだしこのまま遊ぶ？まあ拒否権なんてないんだけど」

そう、私は奴隷で、このヒトはご主人サマ。

あのときは違つて痛くはされないけど、快感でおかしくなりそうだし、でも負けたくない。ここで快楽に負けたら実家に帰れないから。

【淫魔ミミルミ】

「抗うの？こんなに気持ちいいのに？」

「治療のときはあんなに可愛い声出してたのにがんばるのねえ」

【リナ】

「っ……」

柔らかいマットの上で散々に弄られた私が必死に耐えているとご主人さまが声をかけた。

きつとこのヒトは本気を出していない。

その気になれば私なんてあつという間に墮とせるのだろう。

耐えている私を見て面白がっているんだ。

【淫魔ミミルミ】

「そうねえ……アナタならいいかな？」

「そのうちこの近所で闘技場を作るんだって」

「そしたら闘士として試合に出てみない？」

「これだけ我慢できるならきつといい線行けると思うんだけどなあ」

このままこのサキュバスに飼われて好き放題されるよりかはいいかもしれない。

それに家を出たのは自分の武を世に示すため。

この監禁生活で腕は鈍ったかもしれないがこれから鍛錬で戻せばいい。

【リナ】

「闘士になるって言ったらどうなる？」

【淫魔ミミルミ】

「良い返事ねっ♪」

「といってもまだ闘技場はできてないから建設の手伝いの仕事やつてもらおうかなって」

「無意味にトレーニングしてもお金にはならないからねえ」

「アナタが自分を買戻すための貯金とか装備代とかお金はあってもいいんじゃない？」

「別に娼婦やつてもらってもいいんだけど」

「この淫紋は精液を集めることでパワーアップできるわけだし」

娼婦やるくらいならまだサキュバスに弄ばれるほうがいい。

それくらいに男に対して嫌な思い出がありすぎた。

【リナ】

「建設の手伝いでいい」

「それで荷運びをすればいいの？」

【淫魔ミミルミ】

「まあそんな感じじゃない？」

「詳しくは建設担当に聞いてねっ♪」

「あとそうそう、服はこれ着てってね」

「別に裸でもいいんだけど」

体のラインがしつかり見える下着を渡された。

正直心もとないが、目の前のご主人サマの格好よりはマシなので我慢することにした。

少し歩くだけでズレそうな代物なのに全く見えないのはなにかの技術でもあるのかもなとかバカなことを思ったりした。

サキユバスのコンビニ

【淫魔ミミルミ】

「そうそう、地図渡してあげるから仕事行くならここの建設予定地つてところに行つてね〜」

【リナ】

「えっ?」

奴隷一人で外歩かせるとか正気なんだろうか。

脱走し放題だし、スラムのならず者にそのまま持つていかれるとか思わないんだろうか。

【淫魔ミミルミ】

「うんうん、言いたいことは分かるよ〜」

「でも大丈夫。首輪が黒じゃなければアタシたちのモノつてちゃあんと周りには説明してあるからねえ〜」

「あつちなみにリナちゃんの首輪は赤だよ〜」

「色が変わる基準はこれからみんなで考える予定だけど、黒、赤、橙、黄、緑、青、藍、

紫、白、虹つて感じで変わる感じの予定だつて聞いたような」

「仕事は明日からでいいけど今から下見に行つてもいいんじゃない？」

「地図にはコンビニとか娯館の場所も書いてあるから気が向いたら行つてみてね」

まさか現地まで地図を持って行けと言われるとは思わなかった。

このまま脱走することも考えたが、大人しく建設予定地に下見に向かうことにした。

その考えが正しかったと痛感したのはスラムと城下町の境目あたりを通つたときのことだった。

晴れてるのに何故か大きな水たまりができていたのだ。

少し様子を伺つたところ、ちようど脱走を狙う奴隷を見かけた。

ちようど水たまりのあたりのところで突然奴隷が嬌声を上げ始めたところで、野次馬が集まり始め、奴隷が力尽きたところでスラム側に連れ去られていった。

奴隷を運び去つた男共の会話からしてきつとあの娘はロクな目に合わないだろう。

あの水たまりのあたりで首輪の色が赤から黒に変わったということは、首輪の色で奴隷わたしのランク分けがされるといふことなのだろう。あの娘は脱走を仕掛けたからランクを下げられたんだ。

水たまりを片付けないのはきつと見せしめのつもりなのだろうなと思つた。

コンビニとやらを先に見ることにしたが、明らかにご主人サマみたいな格好をした双角の女が立っていた。

店に入るとものすごく適当に挨拶された。

こんなところに入るのはスラムの住人か奴隷くらいだしそんなものだろう。

品揃えを見た感じだと、軽食とか飲み物とか下着とか間に合わせの装備とかが売られていた。

コンビニというのは何でも屋という意味らしい。

飲食物はやけに白かったり、白いものがかかっていたりするものが多いようだ。少し気になったが無一文の私には何も買えなかった。

ここでもバイトを募集しているらしい。

赤い首輪の奴隷が研修中の札を首に下げていたが様子がおかしかったので、ご主人サマみたいにちよっかいをかけられていたのだろう。

双角の店員にバイトを勧められたが、一旦保留にすることにした。

少なくともこの仕事で鍛錬になるとは思えないし。

新入歓迎会／ランジエリーショップ1

コンビニを出ると隣の建物が気になった。

ランジエリーショップと書いてあるが、わざわざコンビニの隣にある理由が謎すぎた。

下卑た男連中が入店しているのも不気味で、今回はやめておくことにした。

奴隷仲間やご主人サマにでも聞くとしよう。

なんて考え事をしていたためか、建物の中からする嬌声も気にもとめなかった。

建設予定地を見てみると、明らかに不自然なくらいに広い場所を確保しているようだった。

地面がえぐれていたり、周辺の建物が変に欠けていたり、明らかに真つ当に用意された土地じゃなさそうだ。

まあ私には関係なさそうなのだけだ。

中の作業員に声をかけると現場責任者とかいうのに案内された。話を聞くと勤務内容は荷運びとか雑用とかをすればいいらしい。

作業日は週5で計40時間で昼に1時間休憩が入るらしい。

作業後にちよつとした娯楽があるとのことでは非参加して欲しいらしい。

あの口ぶりからすると、自由参加なのは作業員であつて、私達奴隷は強制参加のようだった。

作業員から来る無遠慮な視線からしてあまり愉快な目に合わないことが想像できた。

それでも私はここで働くことにした。

闘士として力を示すなら闘技場は絶対必要なのだ。

私の返事を聞いた現場責任者は暑苦しい顔をほころばせ、私の体に手を伸ばし

まさか勤務日前からこんな目に遭うとは思わなかった。

体中すっかりドロドロで、水浴びもできずに外を歩く羽目になった。

あくまで業務の一環なら目溢しされるらしい。

ただ、殴られることはなかったのだ、そのあたりはご主人サマから念押しがあつたのだろう。

完全に下着が役割を放棄しているが、脱ぎ捨てるわけにもいかないのです、周辺の野次を背にしながら移動せざるを得なかった。

ん……下着？

そういえばランジェリーショップなんてのがあったっけ？

現場責任者とか作業員から渡された金額で足りるかは分からないが。

ランジェリーショップとやらに入ってみると一面下着売り場だった。

半数以上が下着の役割を果たせそうもない薄手のものや穴あきのものだったが。

売り場を見ていると、薄手の一枚を着た痴女に声をかけられた。

【下着店員サキユバス】

「あついらっしやーい」

「奴隷ちゃん、ここはハジメテ？」

「よかったら説明してアゲよっか？」

【リナ】

「うん、お願い」

【下着店員サキユバス】

「この店はね、見ての通り下着を売ってるし買い取りもやってるの」

「新品を即売りしても半額にしかならないけど、使用感があれば高く買い取ってアゲルの」

【リナ】

「うん……うん???'」

まるで意味がわからない。

でもまあ、下着を売り買いするだけで多少の資金源になるなら活用すべきなんだろう。

【下着店員サキユバス】

「せっかくだしこれ、買い取ってアゲル」

「それなら新しい下着も買えるでしょ？」

できれば水浴びしてから新しいのを着たいのだが……。

というか備品としてもらったものを勝手に売っていいのだろうか？

【下着店員サキユバス】

「ん？別にいいんじゃない？」

「アタシが欲しいし、新しいの着て帰れば同じでしょ？」

「だってこれはもうキミのものだもん」

「あつシャワーはあっちね」

「ここのボタンを押すと水が出て、これを押すと水が止まって、コレを押すと壁が透明になつたり戻つたりするよん」

【リナ】

「と、透明？」

【下着店員サキユバス】

「いい感じに野次馬にアピールするとおひねりがもらえるのよ」

「お金に困ったり、見せたくなったりしたらやつてみたら？」

「そうそう、シャワー代もちゃんと貰うから払えるなら払ってネ」

……手持ちのお金では足らなさそうだ。

見せびらかすしかないか……？

まあこれ以上見せる相手が増えても誤差だ。

覚悟決めていこう。

H遍歴チュートリアル

それにしても恥ずかしいなんて感情が私に残つてるとは思わなかった。

奴隷になつてからは無理やり剥かれたり犯されたりで、自分からという経験がなかったのもあるのだろう。

【下着店員サキユバス】

「あつおつかれー」

「これだけあればしつかりしたやつが買えるねー」

「まあ買い取りサービスはバニラな下着だけなんだけど」

どうも、下着によっては耐性或能力補正が付いたものがあるらしい。

闘技場ができてからならまだしも、建設作業で必要だとは思えない。

なので着心地がいいものを買うことにした。

これでも実家に居たときよりもいいものな気がするし、奴隷が着ていいものかは分からないが、気にせず着ることにした。

ダメなら問答無用で奪われるだろうし。

【下着店員サキユバス】

「あつそうそう、余ったおひねりはDRM^{ドレム}で渡すねー」

「奴隷ちゃんつて財布なんて持たせて貰えないデシヨ?」

「その首輪にチャージしたげるねー」

残高は店員サキユバスか、ご主人サマに聞けば教えてくれるらしい。

ただDRMはサキユバスの店でしか使えないので、よその店の場合はこちらで元々使われてたお金じゃないとダメらしい。

まあ奴隷とまともにお金のやり取りをしそうな店がサキユバスの店しかなさそうなのかなのだが……。

奴隷商に戻ると受付でご主人サマが雑に手を振ってきた。

【ミミルミ】

「あつおかえりー」

「綺麗になつてるけどちよつと見せてねー」

どうもご主人サマは奴隷のH^エ遍歴が見れるらしい。

建設作業現場での作業と、売春は別換算らしく、売春させられた場合は奴隷店のほうから追加請求をするらしい。

【ミミルミ】

「どうせ体売るなら娼館と変わらないって今思ったでしょ？ 思ったよね？」

【リナ】

「でも奴隷に拒否権なんてないんでしょ？」

【ミミルミ】

「奴隷にはないわねえ」

「まあアタシたちとあつちとの契約で奴隷にひどい扱ひした人は食べていいってことになつてるから乱暴されたら言つてねえ」

「あつ乱暴つて言うのは殴られたり首絞められたりつてことね」

「そういうのは黒の奴隷だけにしてつて話になつてるからねー」

体を弄られたり犯されたりするのは乱暴のうちに入らないらしい。

要するに首輪の色が黒くなつたら最低限の人権すら消え失せるという脅しも入つてるんだらう。

【ミミルミ】

「あつそうそう、アナタのH遍歴は部屋の壁に貼つとくから気になつたら見てねー」

「まあその辺のサキュバスならアナタの首輪見れば分かるんだけどねー」

そんな数字を気にする人間なんて居るんだらうか。

惨めな気分にしかならないような気がする。

体感H遍歴／野菜炒め4番絞りソースかけ、謎ホワイト
ソーススープ、触手ステーキ4番絞りソースかけ

自室に戻ったら何故か鉄格子がドアに変わっていた。

おかしいと思ったが、部屋の壁を見れば分かると思つて中に入ったら奴隷にしては破格のいい部屋が置いてあつた。

壁にはちゃんと私のH遍歴が載っていたので確かに私の部屋なのだろう。

釈然としないが。

項目を眺めると、明らかに私の性別ではあり得ない項目や、明らかに信じたくない項目もあり、気味の悪さで震え上がった。

ふと思つてしまった。この数字を動いている瞬間を見たいと。

ちよつと古そうでもしつかりしたベッドに横たわりながら体に手を伸ば

ちよつとどうかしてたのかもしれない。

なんだかんだで建築現場でぶつかけられたり、ランジエリーショップで視姦されたりで体が火照つてしまったからいけないのだろう。

とりあえず体を流そう。そんなことを数十分前より絶頂数が1増えた壁を見ながら思った。

ご主人さまが謎の魔道具を渡してきた。

どうもこれを使うと溜まったDRMで買いたい物が出来るらしい。

リストを見てみると、下着や食品などの日用品の他、タンスや布団やベッドなどの大型家具まで買えるらしい。

が、日用品はコンビニよりも割高なので、家から出られない事情持ちの人向けなんだろうか。

家具も今ので充分すぎるし、後買うとしたら毛布か変えの布団やタンスくらいだろう。

他にも生活用の魔道具が買えるようだが、私に理解できる気がしない。

服っぽい布切れとか明らかに怪しいオモチャとかを買う人なんて居るんだろうか。

よく見たらトレーニング用品なんてのも置いてあるようだ。

わざわざお金出して疲れる魔道具なんて使う必要があるとは思えないのだけど……。ただ、サンドバッグとかいうのは剣術の的に便利なのかもしれない。

お金が溜まったら買ってみようと思う。

そんなこんなで買い物魔道具で暇つぶししていたらご飯に呼ばれた。

どうも朝と晩は支給があるらしい。

なんか全体的に白いなかがかかっているのだけど……。

【スルスル】

「んー？メニューの説明したほうがいい？」

やめたほうが良さそうだ。

というか嗅ぎ慣れた臭いがする時点で聞く必要すらないし。

喉に流し込むたびに下腹部が熱を持つのが気になるが、残すわけにもいかないだろ

う。

貴重な食事なのだし。

周りを見渡すと私の他に9人くらい奴隷が居るらしい。

全員揃って赤の首輪を付けているので、何かしらの決まりでもあるのだろう。

全員嫌そうな顔をして食事に口を運んでいるが文句を言う雰囲気ではないらしい。

周り雑談しようかと思っただが、食事の時間は食事に集中して、あとで談話室でやれ

と注意されたので仕方なく白濁ソースのかかった食事を口にしたのだった。

談話室の雑談／初仕事

食事後、談話室で雑談することにした。

5人くらいが集まって、残りは会話する気がない人たちらしい。

女なのに力仕事するのは私くらいで、残りは娼館勤めらしい。

娼館仕事は普通にしんどいらしいが、黒首の脱走奴隷はもつと悲惨な目に遭うとばかりに見せしめの光景を見せられて、脱走する気もなくなつたらしい。

あと、他の人の奴隷になる前のことについて色々聞けた。

元貴族のお嬢様でも8時間ぶつ通しのプレイに耐えられるらしく、淫紋の恩恵をそれなりに感謝しているらしい。

建築現場での扱いについて話してみると、どこで働くにしてもこうなるのかとみんな諦め顔だった。

ある程度情報交換をしたところで、就寝時間になった。

部屋に戻って寝始めると、隣のドアが空いた音がした。

会話の内容は聞き取れなかったが、ご主人サマの声がした気がする。

その後、隣の子が喘ぎだしたが、これ今日は寝れるんだろうか……。

案の定、昨日はあまり寝付けなかった。

というか興奮してしまつて私も数字を増やしてしまつた。

隣の子はものすごく眠そうだったが、出勤からは逃れられないらしく、朝食後に娼館に連れて行かれたようだった。

今日の朝食も全体的に白濁していたので、ここの食事はそういうものなのだろう。

建築現場に着くと、色々と荷運びを頼まれた。

実際の作業は作業員がやるようで、私は雑用という立場らしい。

昼食と昼寝の時間があるらしいが、昼食はともかく昼寝が謎すぎる。

今までの経験からしてロクな目に遭いそうにないが、奴隷の立場からして拒否はできなそうだ。

覚悟していくしかない。

あまりに乱暴が過ぎる場合はご主人サマが抗議したり追加料金を取ると言ってくれてはいるけど……。

周りからの視線が気になるが、特に何事もなく昼食の時間になった。意外なことに奴隷の分も他の労働者の分も同じ食事が支給されているようだ。とはいえ、周りからケチを付けられても困る。さっさと食べることにしよう。

何故か途中で食事に白濁液がかけられてしまった。

不思議なことに、白濁液がかかったほうが美味しかった。解せない。

白濁液を食べすぎて味覚がおかしくなっただろうか。

食事が終わったら昼寝の時間と言われて仮眠室に連れ込まれた。

周りの会話で何をやらされるのか否応なしに分からされている。

その分の給料は出るらしいので怒られない程度に頑張ろうか。

着替え無しでこのまま午後の作業をしなきゃいけないらしい。

臭いとか気にならないんだろうか。

出したのはあいつらなのだ……。

墮落への道

どろどろの状態で帰らされた。

娼館通いの子はお風呂で流してから帰るらしいので私の職場の方が劣悪なのかもしれない。

とはいえ、あの頃と違って殴られたり首絞められたりすることが少ないからマシだと思ってしまう。

そういう男が出たら周りが止めてくれるし、その場で追い出してくれたし。帰り道にどろどろの下着を売って新品の下着を買った。

絶対何かが間違っているのだが、そういう需要があるらしいということに気がしないことにした。

深く気にしたら気分が悪くなるだろうし、そこまでの余裕もないのだから。

【下着店員サキユバス】

「んー……いい写真が取れたねー」

「ところでもっと稼げる方法があるんだけど興味あったりしない？」

【リナ】

「残念だけど門限があるから」

【下着店員サキユバス】

「そっかー。じゃあしようがないねー」

どうせ碌な目には合わないだろうが、建設現場でされたことを考えるとそういう仕事が増えてももう誤差にししか思えない。

門限を理由にできなかつたら首を縦に振つただろうと考えると私も墮ちたなあと思つた。

精液を浴びるたびに気分が良くなる体質になつた気がするし。

そういうのが嫌な自分が塗りつぶされきつたら完全にダメになるのだろう。

そんなことを考えながら奴隷商に戻つた。

【淫魔ミミルミ】

「あっおかえりー」

「ちよつと痣になつちやつてるけどそのうち直るから気にしないでねー」

「今すぐ直すこともできるけどどうする?」

【リナ】

「やめとく。そのうち直るならムリはしたくないし」

【淫魔ミミルミ】

「そっかー。ちよつと面白いことになりそうだったけどそういうならしょうがないかー」

正解を引いたらしい。

その気になれば無理やり命令することも出来るだろうけど今のご主人サマは奴隷を大事にする方針らしい。

【淫魔ミミルミ】

「無理やりつて良くないと思うんだよねー」

「自分から落ちて貰わないと面白くないし」

「その気になればすぐ堕とせる魔法だつてあるんだけどねー」

「リナちゃんはいつ堕ちるかなー？」

【リナ】

「……」

とにかくこの状況は良くはない。

どうにかして体を鍛えないと……。

【淫魔ミミルミ】

「そうそう、リナちゃんは明日休みだからゆっくり休んでねー」

「その代わり今夜は寝かさないケド」

耐えきれぬ？

耐えきれぬしかないが……。

【淫魔ミミルミ】

「そんなに耐えきれぬ自信があるの？」

「いい表情ねー」

「こういう娘を蕩けさせるのが面白いのよねー」

本当にここのご主人サマはいい性格をしていると思う。

気持ちだけでも負けないように気合を入れないと……。

闘技場第1試合

そんなこんなで奴隷商の建物と闘技場の建設現場と下着売り場とコンビニを歩き来する生活が過ぎて一年が過ぎた。

明らかに一年で出来る規模の建物じゃない気がしたが、わたし奴隷には関係のない話だった。

なにより、元々私がやりたかったのは土建作業の下っ端ではなく、闘技場で自分の力を示すことだったわけだし。

自分の身体を賭けた決闘は相手次第で決まるらしいが、試合は奴隷の好きなタイミングで申し込めるらしい。

もちろん先着順での予約になるわけだが。

というわけで、早速申し込むと、闘技場の第1試合にエントリーされた。

対戦相手はトレーニングルームでよく顔を合わせていた奴隷のシアだった。

シアは土建作業ではなく娼館勤めだったらしいが、休日にトレーニングする習慣だったらしい。

普通なら剣の道出身で、体力仕事を続けていた私の敵ではないはずだが、何か嫌な予

感がする。

お互いに着ている格好は、いつもの下着の上に申し訳程度の軽鎧だけ。勝利条件は相手を戦闘不能にすること。

普通に斬れば勝てるはずだが、どうも観客が求めているものは違うらしい。下卑た野次ばかりが飛んできて身が竦む。

似たような言動は散々経験したはずなのに。

対戦相手のシアは観客の視線にどうじていない様子だった。

それどころか客に対して軽く手を振るくらいの余裕もあった。

入場すると何故かご主人サマが司会をやった。

不自然なくらいに声が響いていたが多分魔法なんかでも使っていたのだろう。

闘技場自体の初試合のためか、私達の紹介は試合関係ではなく、体型やら感度やらのどうでもいい話だった。

ある程度試合をすれば過去の試合の振り返りや、二つ名なんかを紹介する場にする予定らしい。

そんな感じで互いに剣を構える。

【司会ミミルミ】

「第1試合、ランクR5奴隷リナVSランクR5奴隷シア！」

「レディー……ファ……イ!!!」

試合開始とともに距離を詰め、激しく斬りかかる。

剣と剣がぶつかり合い激しい音が鳴ったが、感触がやけに重い。

相手は素人のはずだが……。

【シア】

「もしかして余裕で勝てるのかって思った？」

「でも練習のときと同じ動きなんてしてたらバレバレなのよ」

「そらー!」

【リナ】

【!!】

シアが肩をぶつけて押し倒してきた。

観客が盛り上がり、実況が何かを言ってるようだが、実況の声の内容がこちらには伝

わってこない。

大体何を言ってるかは分からなくもないが。

どうにか抵抗しようとしたが、不利な体勢に抑え込まれた挙げ句に、弱いところを

弄ってくるため押し返せない。

【リナ】

「な、なんで？」

「これは剣の試合じゃないの？」

【シア】

「分かってないの？ 剣士ちゃん。」

「これはねー相手を動けなくしたほうの勝ちだって……ねええええええ！」

【リナ】

「つつつ~~~~~!!!」

最終的に全部剥かれて散々にイカされて負けてしまったのだった。